

# 豆田遺跡

—荒川小学校プール移転工事に伴う発掘調査報告書—

平成29年(2017年)3月

姫路市教育委員会

## 序

姫路市内には数多くの有形無形の文化財が残され、歴史文化の重厚さを物語っています。なかでも地中に埋もれた遺跡（埋蔵文化財）は約1,200箇所にも達し、現在では失われた人々の暮らしや文化を今に伝えています。

姫路市教育委員会では、埋蔵文化財センターが中心となって、これらの遺跡の発掘調査を進めるとともに、現地説明会や企画展等を通じて調査成果を市民の皆様に広く伝えるよう努めています。

豆田遺跡は、市域の南部、水尾川と大井川に挟まれた沖積地に位置します。豆田遺跡周辺一帯は、応永年間（1394年～1427年）には「伊和西」と呼ばれる国衙別納地ありました。

このたびの調査では、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の遺構を検出し、多くの成果を挙げることができました。ここに調査成果をとりまとめ、今後の調査・研究の進展に資する所存です。

最後になりましたが、発掘調査事業の実施、並びに報告書作成にご協力賜りました関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫

## 例　　言

1. 本書は、姫路市井ノ口368.369-1,370-1, 371-1に所在する豆田遺跡（県遺跡番号：020576）において姫路市立荒川小学校プール移転工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の現地作業については有限会社松浦興業が、空中写真測量は株式会社 八州に委託して実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部 埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　　例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3. 遺構の略称は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編一』記載の略号を使用し、以下のように呼称している。  
SB：掘立柱建物跡跡、SK：土坑、SP：柱穴・小穴、SD：溝跡、NR：旧河道路
4. 遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
5. 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
6. 遺物番号は基本的に通し番号とする。
7. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
8. 本報告書での土器の年代については、それぞれ下記の論考によるものである。

古式土師器：長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年－播磨編一』 大手前大学史学研究所  
土師器：小森俊寛・村上憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 （財）京都市埋蔵文化財研究所  
東播系須恵器：森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社  
日本中世土器研究会 2015 「東播系須恵器－編年と分布から考える－」『中近世土器の基礎研究26』  
土製煮炊具：長谷川 真 2006 「瀬戸内東部～播磨」『第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』 中世土器研究会  
備前焼：伊藤 晃 1995 「中世陶器 備前」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と体制	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的・歴史的環境	4
第2節 既往の調査	5
第3章 調査の成果	6
第1節 調査区の基本層序	6
第2節 古墳時代の遺構・遺物	6
第3節 古代・中世の遺構・遺物	6
第4節 自然河道	11
第4章 総括	12

## 表目次

表1 遺物観察表

## 図版目次

図版1 遺跡 1 調査の位置と周辺の遺跡 / 2 調査区位置図	図版7 遺構 SB02 平・断面図
図版2 遺構 調査区平面図	図版8 遺構 中世遺構平・断面図 (1)
図版3 遺構 調査区北壁土層断面図	図版9 遺構 中世遺構平・断面図 (2)
図版4 遺構 調査区東壁土層断面図	図版10 遺構 中世遺構平・断面図 (3)
図版5 遺構 1 SK01 平面図 / 2 SK01 断面図 / 3 SK01 遺物出土状況図	図版11 遺構 NRO1 平・断面図
図版6 遺構 SB01 平・断面図	図版12 遺物 出土土器 (1)
	図版13 遺物 出土土器 (2)
	図版14 遺物 出土土器 (3)

## 写真図版目次

写真図版1 調査区全景(北より)
写真図版2 調査区全景(南西より) / 調査区全景(西より)
写真図版3 SK01土器出土状況(南より) / SK01完掘状況(西より)
写真図版4 SB01 (南より) / SB01 柱穴⑥土層断面 / SB01 柱穴⑦土層断面 / SB01 柱穴⑧土層断面 / SB01 柱穴⑨土層断面
写真図版5 SB02 (北より) / SB02 柱穴①土層断面 / SB02 柱穴⑥土層断面 / SB02 柱穴⑧土層断面 / SB02 柱穴⑩土層断面
写真図版6 調査区北壁(西半)土層断面(南東より) / 調査区北壁(東半)土層断面(南西より)
写真図版7 試掘調査出土遺物(6) / 試掘調査出土遺物(8) / SK01出土遺物(9) / SK01出土遺物(10) / SK01出土遺物(11)
写真図版8 SK02出土遺物(15) / SK03出土遺物(17) / SP05出土遺物(22) / SP22出土遺物(31) / SD13出土遺物(50) / NRO1出土遺物(53) / NR01出土遺物(55)

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯と体制

姫路市井ノ口368、369-1、370-1、371-1において姫路市立荒川小学校プール移転工事が計画された。当該地の東半の一部は金龜山（標高29.3m）を中心に広がる法輪寺山遺跡（県遺跡番号020448）に該当し、市道を挟み南側には中世の集落遺跡である豆田遺跡（県遺跡番号020576）が隣接している。このため、工事に先立ち、試掘調査及び確認調査を実施することとなった。調査は、平成26年(2014年)5月20日から5月25日の期間において、工事予定範囲に10ヶ所の調査区（1m×10m）を設定し行った（調査番号20140460）。調査ではこれまで豆田遺跡の北限よりも更に北側で弥生時代の河道、中世の遺構や遺物が確認された。この結果、豆田遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が北西に拡張され、プール移転予定地については全面発掘調査を実施することとなった。本発掘調査の現地調査期間は、平成27年（2015年）年3月10日から同年5月19日で調査面積は790㎡である。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

#### 平成27年3月31日まで

##### 教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫

主 事 小林 啓祐

教 育 次 長 林 尚秀

係 長 森 恒裕

生涯学習部長 小林 直樹

技 術 主 任 小柴 治子（調査担当）

文化財課長 福永 明彦

中川 猛

係 長 大谷 輝彦（調整担当）

南 繁和

技 術 主 任 福井 優（調整担当）

技 師 関 梢（調査担当）

##### 埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

嘱 託 職 員 香山 玲子、田中 章子、玉越 綾子、

係 長 岡崎 政俊

野村 知子、三輪 悠代

臨 時 職 員 黒岩 紀子、清水 聖子、寺本 祐子、

藤村 由紀

#### 平成27年4月1日から6月30日まで

##### 教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫

主 事 小林 啓祐

教 育 次 長 林 尚秀

係 長 森 恒裕

生涯学習部長 一

技 術 主 任 小柴 治子（調査担当）

文化財課長 福永 明彦

中川 猛

係 長 大谷 載彦（調整担当）

福井 優

技 術 主 任 福井 優（調整担当）

技 師 関 梢（調査担当）

##### 埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

嘱 託 職 員 香山 玲子、田中 章子、玉越 綾子、

係 長 岡崎 政俊

野村 知子、三輪 悠代

臨 時 職 員 黒岩 紀子、清水 聖子、寺本 祐子、

藤村 由紀

平成27年7月1日から平成28年3月31日まで

教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫

教 育 次 長 八木 優

生涯学習部長 植原 正則

文化財課長 花幡 和宏

係 長 大谷 輝彦（調整担当）

技術主任 南 眞和（調整担当）

埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

係 長 岡崎 政俊

主 事 小林 啓祐

係 長 森 恒裕

技術主任 小柴 治子（調査担当）

中川 猛

福井 優

技 師 関 梢（調査担当）

技 師 黒田 祐介

嘱託職員 香山 玲子、田中 章子、玉越 紗子、

野村 知子、三輪 悠代

臨時職員 黒岩 紀子、清水 聖子、寺本 祐子、

藤村 由紀

平成28年4月1日から

教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫

教 育 次 長 八木 優

生涯学習部長 植原 正則

文化財課長 花幡 和宏

係 長 大谷 載彦（調整担当）

技術主任 南 眞和（調整担当）

埋蔵文化財センター

館 長 前田 光則

係 長 岡崎 政俊

主 事 小林 啓祐

係 長 森 恒裕

技術主任 小柴 治子（調査担当）

中川 猛

福井 優

技 師 関 梢（調査担当）

技 師 黒田 祐介

嘱託職員 香山 玲子、田中 章子、玉越 紗子、

野村 知子、三輪 悠代、黒岩 紀子、

清水 聖子、松田 紗子

臨時職員 秋枝 芳、寺本 祐子、藤村 由紀

## 第2節 調査の経過

### 1. 試掘・確認調査（遺跡調査番号20140460）

工事予定範囲に10ヶ所の調査区（1m×10m）を設定し、西側から順番に1区から10区まで番号を付した（図版1-2）。調査面積は100m<sup>2</sup>である。現況が水田であったため、耕土及び床土を機械によつて除去し、その後人力による精査を行った。

その結果、調査地西側に設定した1区では、耕作土直下で自然堆積層と考えられる砂礫層を確認した。6区でも1区同様、自然堆積層を確認したが、概ね東から西へ傾斜した堆積をみせていた。1・6区を設定した調査地の西辺は、その他の調査区が位置する耕作地よりも一段低く、現況で約0.5mの比高差がある。これは、先にみた自然堆積層が現在の大井川以前の旧河道にあたり、調査対象地が西方へ傾斜している旧地形を反映しているものと考えられる。なお、これらの調査区では遊離した状態で土器の細片がわずかに出土したのみで遺構は確認しなかった。

2区では、現地表下約0.2mで遺構検出面である黄灰色シルト質土層を検出したが、遺構は確認しなかった。調査地のほぼ中央に設定した3区では、現地表下約0.2m～0.4mで遺構検出面である黄灰色シ

ルト質土層を確認し、土坑3基とピット10基を検出した。出土遺物から時期はいずれも中世の範疇に収まるものと考えられる。また、3区の南側、調査対象地の南端に設定した8区では、灰色砂礫層上で、土坑1基、ピット14基、溝状遺構1条を検出した。いずれも出土遺物等から中世のものであると考えられる。

調査地の東側には、4・5・7・9・10区を設定し、いずれの調査区においても現地表下約0.2m～0.3mで遺構検出面である黄灰色シルト質土層を確認した。また、4・5・7・10区では東側へ傾斜する落ち込みのプランを確認し、9区ではその対岸に当たる西向きの落ちのラインを検出した。土層の堆積状況から金龜山西麓を南流していた旧河道であると考えられる。河道の幅は約10mと推定する。この落ち込みについて一部断ち割りを行い、土層の観察を行った。結果、下層からは土師器の図版12-1が出土した。また上層から図版12-2～8が出土した。

1は土師器の甕の口縁である。口縁部は外反して立ち上がり、体部外面にはハケメ調整が残る。時期については古墳時代後期に位置づけられる。

2～7は須恵器である。2は杯身である。底部に貼り付け高台をもつ。3は平底の杯身である。2・3の時期は概ね平安時代前期（9世紀後半）と考えられる。4は椀である。ハの字状に開く、しっかりとした貼り付け高台を持つ。5・6は椀の底部である。削り出し高台をもち、底部に糸切痕跡が残る。7は环身の口縁部である。口縁端部がやや外反する。4～7の時期は平安時代後期（11世紀後半）に位置づけられる。8は須恵器の壺である。土器の上半部が欠損しているが、細い頸部をもつタイプの壺であると考える。時期は平安時代後期（10世紀後半～11世紀初頭）に位置づけられるものと考えられる。

試掘・確認調査の結果、調査区西側1・6区では、大井川以前の旧河道の自然堆積がみられ、遺構は確認できなかった。一方、3・8・10区では、中世の土坑やピット等の遺構を検出した。また、金龜山との間には1・6区の旧河道とは別の推定幅10mの南流する流路があることも新たに判明した。

これら調査成果から、1・6区の低位部を除いた範囲について、新たに埋蔵文化財の包蔵地が存在することが明らかになった。今回遺構が検出されたことにより、南に接する豆田遺跡の範囲が広がっていると判断のもと、遺跡が破壊されるプール建設部分を調査対象とし本調査を実施することとなった。

## 2. 本発掘調査（遺跡調査番号20140555）

本発掘調査の対象面積は、790m<sup>2</sup>であり、平成27年3月10日から機械掘削を開始した。機械掘削では、まず耕土を除去し、その後遺構面までの掘削を行った。機械掘削終了箇所から順に遺構検出を行い、平成27年3月14日に遺構検出状況写真を撮影した。調査区西側で確認した旧河道部分については調査区北壁に沿って側溝を掘削し、流路の深さを確認した後、掘削を行った。調査区東側部分については遺構の掘削及び柱穴の段下げ・柱根の確認等を行った。平成27年4月24日に調査区全体の空中写真測量を行った。その後、平成27年4月29日に現地説明会を実施し、約70名の参加を得た。その後、調査区東側旧河道部分については埋戻しを行い、同年5月19日に調査を終了した。

## 3. 遺物整理作業

確認調査（遺跡調査番号20140460）及び本発掘調査（遺跡調査番号0140555）で出土した遺物については、整理作業業務（注記・接合復元・遺物彩色・遺物実測・遺物トレース）を株式会社島田組に委託し、平成27年12月3日から平成28年3月30日まで実施した。

#### 4. 図面整理作業

本発掘調査（遺跡調査番号20140555）に関する図面について、図面整理作業業務（図面トレス、報告書版下作成等）を株式会社島田組に委託し、平成28年8月30日から11月30日まで実施した。

### 第2章 遺跡の位置と環境

#### 第1節 地理的・歴史的環境

調査地を含む姫路市井ノ口周辺は、市域西部、夢前川の旧河道による氾濫原に立地する（図版1-1、以下遺跡については図中の番号のみを記載する）。現在この地域には大井川、船場川という2つの河川が流れおり、それぞれの流域には弥生時代から中世までの遺跡が数多く所在している。

豆田遺跡の周辺でもっとも古い遺物が出土している遺跡が池ノ下遺跡（5）である。池ノ下遺跡では、原位置から遊離した出土状況であるがナイフ形石器が2点出土している。また、遺構からではないものの縄文土器が出土している（兵庫県教育委員会編2012）。このことから、豆田遺跡周辺においてその当時から人々の営みがあったことは明らかである。

調査地の北東に位置する金龜山周辺には、弥生土器の散布地である法輪寺山遺跡（2）や村前遺跡（3）などが所在する。このほか、大井川流域では土山遺跡（30）、石ツミ遺跡（31）、町田遺跡（32）、八反長遺跡（33）において弥生時代の遺構が確認されている。石ツミ遺跡では、土坑から弥生時代前期の土器が出土し、弥生時代の木棺墓が2基確認されている（姫路市教育委員会編2014）。また、八反長遺跡においては、建物跡などの遺構は検出されていないが、弥生時代前期の土器が多数出土している（兵庫県教育委員会編1992）。

船場川流域においても村瀬遺跡（51）、橋詰遺跡（52）、小山遺跡（54）、竹の前遺跡（57）・畠田遺跡（58）、飯田カスカエ遺跡（61）、長越遺跡（38）などの弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が所在する。橋詰遺跡では1960年に山陽中学校構内で行なわれたれた発掘調査において、竪穴住居跡の埋土と思われる層から庄内式土器が一括で出土している（浅田・今里1960）。畠田遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の円形周溝墓、竪穴建物、柵列、溝、土坑などが確認されている。また、飯田カスカエ遺跡では、土坑から庄内期の土器がまとめて出土している（大谷2010）。出土した庄内甕には在地（播磨產）のものと、わずかではあるが河内產のものも含まれていた。この土坑からはこの他に、山陰や讃岐、河内、吉備といった他地域からの搬入土器が出土しており、当時の地域間交流を考える上で貴重な資料である。

長越遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居を検出し、大溝から古墳時代初頭に位置づけられる大量の庄内式土器が出土している。特に甕は、在地産（播磨產）の割合が河内產よりも多く、当地における庄内甕の製作地として位置づけられている。また、畠田遺跡でも旧河道や溝から多量の土器がまとめて出土している。

豆田遺跡の西部に広がる池ノ下遺跡においては古墳時代前期の竪穴住居・土坑・溝が確認されている。出土遺物には、吉備、讃岐、阿波、河内、丹波、但馬、山陰など他地域の土器が出土している（姫路市教育委員会2015）。これは当時のヒト・モノの活発な交流を示すものであり、このように古墳時代初頭において他地域の土器が出土するという遺跡の様相は、当該期の播磨の様況を考える上で重要なである。

豆田遺跡の西側に広がる山塊には、山所群集墳1～8号墳（19）、付城山群集墳1～4号墳（26）な

どの古墳時代後期の群集墳が築かれている。

古代において、豆田遺跡が立地する姫路西部は『播磨國風土記』で「筋磨郡」に推定される場所であり、遺跡が位置する一帯は「伊和里」と呼ばれる土地であったと想定されている。今日でも、町坪周辺では、古代山陽道を基準としたとされる北から東に $23^{\circ}$ に振る条里地割が残っている。豆田遺跡においても、条里と沿うかたちで掘立柱建物跡や溝が確認されている。また、池ノ下遺跡でも古代の掘立柱建物跡跡が確認されており、唐三彩の弁口瓶や円面鏡・石帶などが出土している（兵庫県教育委員会編2012）。

中世になると、豆田遺跡周辺における遺跡の分布はさらに増加し、村東遺跡（3）、池ノ下遺跡、鹿谷道遺跡（8）、出手遺跡（9）、横枕遺跡（10）などで遺構が確認されている。豆田遺跡でも掘立柱建物跡や井戸・土坑墓などが見つかり、池ノ下遺跡や村東遺跡でも掘立柱建物跡や井戸などの遺構が確認されている（姫路市教育委員会編2015）。

また、文献資料では「和名抄」において「伊和郷」という名が見られ、記述から調査地周辺に置かれた荘園であったと考えられている。さらに応永年間（1394～1427）には「伊和西」と呼ばれた国衙別納地であった。JR山陽本線より南側に該当する町坪集落は、江戸時代の『播磨鑑』の中に記述がある「町ノ坪構居」に比定される地であり、羽柴秀吉の英賀城攻略の際に落城したと伝えられる。また、調査地北東、金龜山のふもとに位置する法輪寺は英賀城攻略時に羽柴秀吉に白湯をふるまい、褒美に「湯沢山茶くれん寺」との寺号を与えられたとの言い伝えが残る寺である。

## 第2節 既往の調査

英賀保駅周辺土地区画整備事業に伴い、平成12年度から試掘調査が実施された。その結果、4箇所の遺跡が確認され、英賀保駅周辺遺跡第1地点から第4地点と命名された。平成13年度から本発掘調査が開始された。その後、第1地点から順に豆田遺跡、池ノ下遺跡、大淨口遺跡（6）、村東遺跡と遺跡名が改名され、今日に至る。

豆田遺跡では、平成13年度の調査で、弥生時代と中世の遺構が確認されている。弥生時代の遺構は土坑と不定形の溝状遺構であり、それぞれ出土した土器から弥生時代前期と後期に位置づけられる。中世の遺構としては溝、竪穴状遺構、ピットなどを確認している。特に溝は筋磨郡条里の方位と合致するものであり、埋土からは平安時代末～鎌倉時代の東播系須恵器や土師器とともに鍛冶関係遺物なども出土している（姫路市教育委員会編2002）。

平成15年の調査では、JR山陽本線から荒川小学校の間に広がる区画整理道路部分の調査が行われ、弥生時代の土坑や旧河道、中世の掘立柱建物跡を確認した。弥生時代の旧河道は、最大幅9m、深さ1mを測り、埋土の上層からは弥生時代後期の土器が、下層から弥生時代前期の土器が出土している。土坑からは、弥生時代前期の甕が出土した。中世の掘立柱建物跡は12棟確認している。建物の規模は、3間×3間、3間×2間が主体であり、建物の主軸は、概ね条里地割に沿ったものである。時期は概ね12世紀～13世紀と考えられる。屋敷墓と考えられる中世墓も確認されている。中世墓には木棺墓と土坑墓があり、中からは土師皿や刀子などが出土している。この他に、区画溝と考えられる幅8m、深さ0.8mの溝を確認している（姫路市教育委員会編2005）。

今まで調査がなされているなかで、中世前期においては広域に屋敷が点在する散村的な景観であったものが、中世後期になると現在の町坪集落付近でのみ集落跡が確認されるようになり、大きく集落景

觀が変わることが判明している。また、町坪集落内に比定されている町坪構居に関連すると考えられる水路と堀等も確認されている。

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査区の基本層序

基本層序は、調査区西側では上層から第Ⅰ層 耕土（層厚約40cm）を除去した後、第Ⅱ層上面で遺構を検出した。遺構面の標高は7.0mを測る（図版3）。調査区東側は、第Ⅰ層 耕土（層厚約40cm）を除去後、旧耕土層（第4・6・7・10層）を経て、旧河道の堆積層へと至る。旧河道に係る堆積層の層厚は約1.5mを測る（図版4）。

#### 第2節 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構として土坑を1基確認した。

##### SK01（図版5・12）

調査区西側中央に位置する。土坑の大きさは南北約1m、東西約1mを測る。遺構の深さは約0.9mを測る。土坑内からは、壺2点・甕1点と共に大量の炭化物が出土した。土器は土坑の南東隅からまとまって出土しており、いずれもほぼ完形に近い状態であった。土器の下には炭化物が敷きつめられ、中には木材の形状をとどめているものも見られた。しかし、出土した土器には二次的な被熱痕跡が見られず、土坑内に炭化物を敷きつめた後に土器を掘えたものと考えられる。土器が出土した上層の埋土は層厚約0.4mを測るが、土層の堆積状況から土器埋納後速やかに埋め戻されたものと考えられる。

土坑から出土した土器は、壺2点（図版12-9・10）と甕1点（図版12-11）である。

9は土坑中央から出土した広口壺である。頸部から水平に広がる口縁を持ち、頸部には竹管文が2箇所施されている。底部は平底であるがやや丸みを帯びている。外面はタタキ後、ハケを施し、底部及び肩部付近にミガキを施す。体部内面は、底部に丁寧なケズリが施されており、肩部付近は指頭圧痕が明瞭に残る。10は9の南西で出土した壺である。9と同様に頸部には竹管文を二箇所に施す。体部外面はハケメの後、ミガキが施される。内面は、底部付近はケズリが丁寧に施され、肩部には指頭圧痕が明瞭に残る。また、9と同じく水平に開く口縁をもつと考えられる。しかし、口縁部の破片がまったく出土していないことから、口縁部を打ち欠いたものを埋めた可能性も想定される。9と10は同形の個体であり、土器の形状や胎土から讃岐地域の特徴をもつものである。

11は甕である。口縁部はくの字に屈曲する。胴部外面には細かい平行タタキが施され、外面全体にススが付着していた。底部は小平底である。内面はケズリが丁寧に施されている。

SK01から出土した土器は、いずれの庄内2末～庄内3初頭に位置づけられ、概ね古墳時代初頭に該当するものである。

#### 第3節 古代・中世の遺構・遺物

調査区西側において、掘立柱建物跡・土坑・溝・ピットなどを確認した。

##### 〈掘立柱建物跡〉

### SBO1（図版6）

査区東端に位置するためさらに東側に広がる可能性も考えられる。1間の間隔は約2mである。掘立柱建物跡の柱穴の規模は、概ね径約0.3m、深さ0.1m～0.3mを測る。柱痕跡が確認できたものが多く、使用された柱材は直径約0.1mであると考えられる。

柱穴(SB01-13)からは図版13-12の土師器皿の底部が出土している。底部は手捏ねで成形されているが、その他の部位が確認できなかったため、詳しい時期は特定できなかった。

### SBO2（図版7）

調査区中央南側に位置する。建物の規模は桁行3間×梁行2間(6.9m×4.5m)を測る。1間の規模は約2.2mである。柱穴の規模は、概ね径約0.2m、深さ約0.3mを測る。柱痕跡が残るもの多く、使用された柱材は直径約0.1mであると考えられる。

柱穴(SB2-4)からは図版13-13が出土し、柱穴(SB2-9)からは図版13-14が出土した。13は土師器皿であり、外面にはナデの痕跡が残る。14は東播系須恵器の椀の口縁部である。遺物の時期は、平安時代後期(10世紀後半～11世紀前半)に位置づけられる。

### 〈土坑〉

#### SK02（図版8-1）

調査区西側中央に位置する。東西約0.8m、南北約0.5mの不定形の土坑である。深さは約0.3mを測る。

遺構内からは図版13-15・16が出土した。15は手捏ねの土師器皿である。内外面に指頭圧痕が残る。16は東播系須恵器の鉢である。口縁端部帯が広く、下半部に延びる。内面には強いナデ調整を施す。出土遺物の時期は、概ね室町時代前期(14世紀後半～15世紀前半)のものと考えられる。

#### SK03（図版8-2）

調査区西側中央に位置する。東西約0.4m、南北約1.0mの不定形の土坑である。深さは0.2mを測る。上層は東西方向に延びる溝(SD07)によって切られている。

遺構内からは図版13-17・18が出土した。17は甕形の土製煮炊具である。口縁部は垂直に立ち上がり、端部がやや外反する。体部外面はタタキ調整が残る。頸部はタタキ調整後強いナデを施す。18は羽釜形(播磨型)の土製煮炊具である。内湾する口縁を持ち、端部をやや外反させる。断面三角形の短い鍔をもつ。出土遺物の時期は、室町時代前期(15世紀前半)に該当する。

#### SK06（図版10）

調査区南端に位置する。遺構の北側はSD12による削平を受けている。東西1.5m、南北約0.4m、深さ約0.06mを測る。出土した遺物はいずれも細片であり時期の特定には至らなかった。

#### SK07（図版10）

調査区南端に位置する。調査時は土坑と認識して遺構番号を付したためここに記述するが、土坑ではなく東西方向に延びる溝の可能性がある。幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。

遺構からは図版13-19が出土した。19は土師器の壺の体部片である。底部を欠損しており、時期を特定するには至らなかった。

### SK09 (図版8-3)

調査区南西に位置する。東西約0.5m、南北約0.7mの楕円形を呈する土坑である。深さは約0.7mを測る。遺物が出土しておらず時期は特定できなかった。

### 〈柱穴〉

### SPO4 (図版10)

調査区中央、SK01の南西に位置する。直径約0.4cm、深さ約0.4mを測る。

遺構からは土師器皿の口縁部（図13-20）が出土している。細片であるが、概ね室町時代の範疇に収まるものと考える。

### SPO5 (図版10)

調査区中央、SK01の南側に位置する。直径約0.3m、深さ約0.5mを測る。

遺構からは図版13-21・22がした。21は東播系須恵器の椀である。やや外反する口縁端部をもつ。22は土師器の甕である。頸部から「く」の字に折れ口縁端部を垂直に立ち上げる。体部外面にはタタキ調整が残る。出土した遺物の時期は、平安時代後期（11世紀後半）に位置づけられる。

### SPO6 (図版10)

調査区中央に位置する。直径約0.3m、深さ約0.4mを測る。

遺構から図版13-23が出土した。23は備前焼の擂鉢である。時期は室町時代前期（14世紀初頭）に位置づけられる。

### SP14 (図版10)

調査区中央に位置する。東西約0.5m、南北約0.4m、深さ約0.5mを測る。

遺構からは図版13-24が出土した。24は堀の口縁である。器形は甕形を呈し、時期は室町時代後期（15世紀後半）に該当する。

### SP17 (図版9)

調査区北西に位置する。直径約0.2m、深さ約0.4mを測る。

遺構から図版13-25が出土した。25は須恵器の椀の口縁部である。土器が細片であるため時期の特定はできなかった。

### SP18 (図版10)

調査区中央、SP14の東側に近接する。直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。

遺構からは図版13-26・27が出土した。26は備前焼擂鉢の口縁部である。27は鉄鉢形の土製煮炊具である。口縁端部の断面は三角形を呈し内側に肥厚する。外面体部にはタタキを施すが、口縁部は丁寧なナデが施される。出土した遺物の時期は、室町時代後期（15世紀後半）に位置づけられる。

### SP19 (図版10)

調査区南西に位置する。直径約0.3m、深さ約0.5cmを測る。

遺構からは図版13-28が出土した。28は東播系須恵器の鉢の口縁である。時期は平安時代後期（12世紀前半～中期）に位置づけられる。

### SP20 (図版10)

調査区南側に位置する。直径約0.2m、深さ約0.5mを測る。

遺構からは図版13-29・30が出土した。29・30は手捏ねの土師器皿である。時期は概ね室町時代

後期（16世紀）に該当すると考えられる。

SP22（図版10）

調査区西端に位置する。不定形のピットで東西約0.6m、南北約0.3m、深さ0.2mを測る。

遺構からは図版13-31・32が出土した。31・32は、手捏ねの土師器皿である。時期はいずれも概ね室町時代後期（16世紀）の範疇におさまるものと考えられる。

SP25（図版10）

調査区中央、SD07によって遺構の上層が削平されている。直径約0.3m、深さ約0.5mを測る。

遺構からは図版13-33が出土している。33は須恵器の杯蓋の口縁部である。細片であるため時期の特定は困難であるが、概ね古墳時代後期の範疇におさまるものと考える。

SP28（図版10）

調査区南東、SX02完掘後に床面で検出した遺構である。直径約0.3m、深さ0.5mを測る。

遺構からは図版13-34が出土した。34は土製煮炊具である。口縁端部の形状は三角形に近い形状を示し、内面を肥厚させる。口縁部には受け口を持ち、内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、口縁部付近にはススが付着する。器形的には播磨でみられる鉄鉢型の鍋と同様の特徴をもつが、外面調整にタタキが見られないなど異なった要素をもつ。時期は、概ね室町時代の範疇に収まるものと考える。

SP39（図版10）

調査区南側、SK07の北側に位置する。直径約0.2m、深さ約0.4mを測る。

遺構からは図版13-35が出土した。35は手捏ねの土師器皿である。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。細片であり、時期は室町時代後期（16世紀）に該当すると考えられる。

SP41（図版10）

調査区中央、SK01の北東に位置する。直径約0.4m、深さ約0.7mを測る。

遺構からは図版13-36が出土した。36は土師器皿の口縁である。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。時期は、室町時代後期（16世紀）に該当すると考えられる。

SP47（図版9） 調査区西端に位置する。直径約0.2m、深さ約0.2mを測る。

遺構からは図版13-37が出土した。37は鉄鉢型の土製煮炊具の口縁である。口縁端部を肥厚させ、断面が三角形を呈する。時期は室町時代後期（15世紀前半）に該当する。

SP52（図版10） 調査区南西に位置する。直径約0.2m、深さ約0.4mを測る。

遺構からは図版13-38が出土した。38は播但型の土製煮炊具である。口縁部は直線的に立ち上がり、内側に肥厚する。体部外面はタタキ調整を施し、内面には横方向にハケメが施されている。時期は、室町時代後期（15世紀後半～16世紀前半）に該当する。

SP56（図版10）

調査区南側、SX01の完掘後に、床面で検出した遺構である。直径約0.2m、深さ約0.5mを測る。

遺構から図版13-39が出土した。39は甕もしくは壺の底部である。内面には回転ナデを施す。時期を特定するには至らなかった。

SP57（図版10）

調査区南端、SD12の南側に位置する。東西約0.6m、南北約0.3m、深さ約0.3mを測る。

遺構からは図版13-40が出土した。40は須恵器の壺もしくは甕の底部である。底部外面上には糸切り痕が残る。時期は特定するには至らなかった。

### SP63(図版10)

調査区中央、SX03の西側に位置する。直径約0.3m、深さ約0.4mを測る。

遺構からは図版13-41が出土した。41は東播系須恵器の椀である。体部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。時期は、平安時代後期（11世紀後半）と考えられる。

### SP70(図版10)

調査区南側、SK09の西側に位置する。直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。

遺構からは図版13-42が出土した。42は東播系須恵器の椀の口縁である。時期は、平安時代後期（11世紀後半～12世紀初頭）に位置づけられる。

### SP73(図版10)

調査区南側、SX02の南側に位置する。直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。

遺構から図版14-43が出土した。43は土師器の甕の口縁部である。頸部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。土器の胎土に砂粒を多く含み、他の甕や鍋などとは様相が異なることから、他地域の土器である可能性もある。時期については概ね中世の範疇に収まるものと考えられる。

### SP80(図版10)

調査区南側、SX01の南側に位置する。東西約0.2m、南北約0.4m、深さ約0.4mを測り、楕円形を呈する。

遺構から図版14-44が出土した。44は須恵器の底部である。底部の形状から東播系須恵器の鉢か椀の底部の可能性が考えられる。時期については特定することができなかった。

### SP82(図版10)

調査区中央、SX03の北西に位置する。直径約0.3m、深さ約0.4mを測る。

遺構から図版14-45が出土した。45は手捏ねの土師器皿である。時期は室町時代後期（16世紀）と考えられる。

## 〈溝〉

### SD01(図版9)

調査区北西に位置する。東西方向に延びる溝である。幅約0.4m～0.5m、深さ約0.06mを測る。SD01を完掘後、SD01下層に位置するSD11が南側に折れ、SD02につながる同一の溝であることが判明した。

### SD02(図版9)

調査区北西に位置する。南北方向に延びる溝である。幅約0.2m、深さ約0.06mを測る。北側を東西方向に延びる溝（SD11）と同一の遺構である。

ピットから図版14-46が出土した。46は手捏ねの土師器皿である。時期は概ね室町時代後期（16世紀）に該当する（小森・村上1996）。

### SD03(図版9)

調査区西側中央に位置する。東西方向に延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.06mを測る。

### SD04(図版9)

調査区北西に位置する。東西方向に延びるが北西部が南側にL字に折れる。幅約0.3m、深さ約0.06mを測る。

#### SD05（図版10）

調査区中央に位置する。東西方向に延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。

#### SD06（図版10）

調査区中央に位置する。東西方向に延びる溝である。幅約0.4m、深さ約0.05mを測る。SD06付近では溝が複雑に切り合っており、SD06はその中で最も下層にあたる溝である。

遺構から図14-47が出土した。47は須恵器の壺の体部である。外面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。時期は、平安時代後期（10世紀後半）に位置づけられる。

#### SD07（図版10）

調査区中央に位置する。東西方向の延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。

遺構からは図版14-48が出土した。48は須恵器の杯蓋である。体部にはわずかではあるがカエリをもち、口縁端部は外反する。全体的に器厚が薄い。時期は、古墳時代後期と考えられる。

#### SD08（図版10）

調査区中央に位置する。東西方向の延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。

遺構からは図版14-49が出土した。49は口縁部のみの小片であるが、鉄鉢形の土製煮炊具の口縁である。時期は、室町時代後期（15世紀前半）に位置づけられる。

#### SD13（図版10）

調査区南側に位置する。東西方向に延びる溝で幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。

遺構からは図版14-50・51が出土した。50は羽釜形（播磨型）の土製煮炊具である。口縁は内湾し、断面が三角形を呈する羽をもつ。外面には成形時のタタキ痕が残る。51は須恵器の甕で、短い頸部に外反する口縁をもつ。体部外面にはタタキ痕が残る。出土遺物の時期は、室町時代後期（15世紀前半～16世紀中頃）に位置づけられる。

### 第4節 自然河道

NRO1 調査区の東側において確認した。河道の幅は東西方向に約60m、調査区内での延長は約100mを測る。深さは最も深い部分で約2.5mを測り、河道は北西から南東方向に流れをもつ。調査区周辺では、既往の発掘調査時に弥生時代前期、ならびに弥生時代後期に該当する河道が複数本確認されている。このことから、本調査区で確認した河道がそれらにつながるものである可能性も考えられる。

河道内には、大きく3つの流れが確認されており、古い時期のものから順にNRO1-1からNRO1-3とする。以下、順に記述する。

#### NRO1-1（図版11）

NRO1において最も古い段階の河道である。幅40m、深さ1.0mを測る。

河道の下層（図版3・4）からは図14-52～57が出土し、上層からは図版14-60～64が出土した。52は、弥生土器の壺もしくは甕の底部である。外面にはハケメが残る。時期は弥生時代後期の範疇に収まるものと考える。

53・54は、土師器の壺もしくは甕の口縁である。53は、口縁部は外反し、外面は板ナデで調整し、内面にはケズリが施される。54は甕もしくは高杯の口縁部である。大きく外反する口縁端部に沈線をもち、外面は板状工具によるナデ、内面はケズリが施される。55は高杯の脚部片である。外面には細

かいハケメが残る。高杯の杯部との接合時に粘土充填法が用いられたことがわかる。56は甕もしくは甕の底部である。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。57は甕の口縁部であると考える。外面にはタテ方向のハケメが残り、内面には平行タタキが残る。58・59は高杯の脚部である。脚部上部をすぼめて成形している。外面の調整はいずれも不明瞭であった。60は高杯の脚の端部である。これら土器は破片であるため、年代の特定はできないものの概ね古墳時代の範疇に収まるものと考えられる。

61は須恵器の杯蓋である。62は須恵器の杯身である。時期はいずれも古墳時代後期に位置づけられる。63は短頸甕の口縁である。直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端部を外反させる。口縁端部の断面は三角形を呈する。時期は奈良時代後期（8世紀後半）に該当するものと考える。64は土器皿である。手捏ねで成形されている。時期は概ね室町時代後期（16世紀）の範疇に収まるものである。

#### NR01-2（図版11）

NR01の西側に位置する。NR01-1の東側部分が河川堆積によって埋没した後の河道であると考えられる。幅約1.6m、深さ約0.3mを測る。地山である礫層とシルト層の間から土器類が出土しているが、細片であり図化耐えうるものではなかった。

#### NR01-3（図版11）

NR01の全域が河川堆積により埋没した後の河道である。幅約1.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐色砂礫からなり、遺物は出土しなかった。

NR01内の各河道について、詳細な時期については確認することができなかった。しかし、それぞれの河道理土の堆積状況や出土した遺物の時期、周辺の遺構状況などから総合的に考察すると、NR01は弥生時代後期以前より調査地周辺を流れていた河道であり、その後、中世段階には河川堆積物により埋没したと考えられる。

## 第4章 総括

今回の発掘調査により以下の成果が得られた。

### ・古墳時代の遺構

今回の発掘調査で確認された古墳時代の遺構はSK01のみである。

SK01からは、古墳時代初頭に位置づけられる甕2個体と甕1個体が炭屑の上に据えられたような状態で出土した。土器の下層から出土した炭化物の中には木材の形状を保っているものもあり、土坑内でこれら木材が燃やされたものと考えられる。しかしながら、出土した土器には、甕については使用時に付着した炭化物がみられたものの、いずれも二次的な被熱痕跡は見られなかった。このことから、鎮火した後に土器を土坑内の埋納したものと考えられる。

このような例は、姫路市内ではなく、現段階では遺構の性格を特定できないが今後の類例の増加を待ちたい。

また、この遺構から出土した土器は当地の土器とは異なる特徴をもつ。甕2個体は、器形から四国、讃岐地域の影響がみられる。甕は、畿内、河内地域の特徴的な土器である庄内甕である。いずれも器形は在地のものと異なるが、胎土は在地のものと考えられることから、土器が運ばれてきたのではなく、他地域から来た製作者、もしくはその技術を受け継いだ在地の製作者が製作したものである可能性が高い。当該期における地域間交流を考えるうえでも興味深い資料である。

#### ・平安時代の遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡を2棟確認した。SB02は柱穴からは出土した遺物の時期から、平安時代後期に位置づけられる遺構であると考えられる。今回の調査地の南側でおこなわれた英賀保駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査では、12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物跡が12棟確認されており、建物規模は3軒×3軒、3軒×2軒を基本とする（姫路市教育委員会2003）。

建物の主軸はいずれも条里地割に沿うものであり、今回確認した遺構とともに集落内の遺構の変遷を考える貴重な資料である。

#### ・室町時代の遺構

今回の調査では、土坑や溝とともに100基を超えるピットを確認した。これらの遺構から建物等の配列を想定することは困難であり、幾度も建物が建て替えられていたことが覗える。また、遺構からは概ね室町時代後期（15世紀～16世紀）の遺物が出土しており、内容は羽釜や鍋、土師器皿といった生活雑器が多く、当該期における活発な集落活動を見ることができる。

### 〈参考文献〉

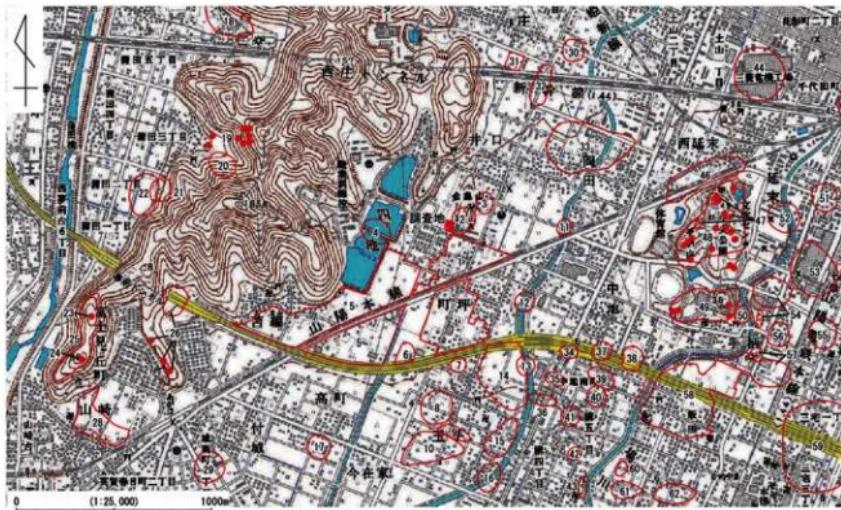
- 浅田芳郎・今里幾次 1960 「播磨橋詰道路発掘調査略報」
- 大谷輝彦 2010 「船場川東道路群」「姫路市史」第7巻下 資料編考古 姫路市史編纂委員会
- 姫路市教育委員会 2002 「TSUBOHORI 平成13年度（2001） 姫路市埋蔵文化財調査概報」
- 姫路市教育委員会 2005 「TSUBOHORI 平成15年度（2003） 姫路市埋蔵文化財調査概報」
- 姫路市教育委員会 2014 『石ツミ道路第1次発掘調査報告書』
- 姫路市教育委員会 2015 『TUBOHORI 2015 一姫路市埋蔵文化財調査略報一』
- 兵庫県教育委員会 1978 『播磨・長越遺跡』 兵庫県文化財調査報告12
- 兵庫県教育委員会 1992 『堂田・八反長発掘調査報告』 兵庫県文化財調査報告108
- 兵庫県教育委員会 2012 『池ノ下遺跡 中播都市計画事業英賀保駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
『兵庫県文化財調査報告 第435冊』

表1 遺物観察表

種別	器種	出土遺 跡	口径	底 径	器高	色調 (外)	色調 (内)	構成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考	
1 土師器	壺	試掘遺跡	(25.7)	—	(5.2)	10YR1/2	10YR1/3	深褐色	0.3mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部約1/8	ナデ	ナデ		
2 陶器	杯	試掘遺跡	—	15.8	2.15	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を少量含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ	斜付け系	
3 陶器	杯	試掘遺跡	(14.4)	(9.0)	3.55	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ		
4 陶器	杯	試掘遺跡	—	(10.2)	(3.6)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を少量含む	3/1	ロクロナデ	ロクロナデ	外側に黒帯付	
5 陶器	杯	試掘遺跡	—	6.0	(3.3)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を少量含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ	底面凹凸付	
6 陶器	杯	試掘遺跡	19.3	8.0	8.1	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ	底面凹凸付	
7 陶器	杯	試掘遺跡	(12.4)	—	(4.95)	NL	NL	深褐色	0.1mm以下の砂粒を含む	1/8	ナデ	ナデ		
8 陶器	杯	試掘遺跡	—	(8.3)	(7.5)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を少量含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ	底面凹凸付	
9 土師器	広口壺	SK01	18.5	8.4	29.8	10YR8/3	10YR8/3	深褐色	0.6mm以下の砂粒を含む	3/7	ナデ	ナデ	底面裏面有り	
10 土師器	広口壺	SK01	—	6.0	(20.8)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	3/7	ナデ	ナデ	底面裏面有り	
11 土師器	壺	SK01	(16.7)	3.0	24.15	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/2	ナデ	ナデ	外側模様付	
12 土師器	壺	SK01	—	(7.4)	(0.75)	SV7/8	SV7/8	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/3	ナデ	ナデ		
13 土師器	壺	SK01	(15.0)	4.6	2.4	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/3	ナデ	ナデ		
14 陶器	杯	SK02	(16.2)	—	4.25	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	4/9	ロクロナデ	ロクロナデ		
15 土師器	壺	SK02	8.1	—	1.8	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	3/7	ナデ	ナデ		
16 陶器	杯	SK02	(20.4)	—	(4.8)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/10	ナデ	ナデ		
17 土師器	壺	SK02	17.1	—	9.7	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒をやや多く含む	1/7	ナシキ	ナシキ	外側模様付	
18 土師器	壺	SK02	(20.8)	—	4.65	10YR8/4	10YR8/4	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/20	ナシキ	ナシキ	底面角切り付	
19 土師器	壺	SK07	(5.4)	—	—	SV7/8	SV7/8	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	1/3	ナデ	ナデ		
20 土師器	杯	SP04	—	—	2.35	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/20	ナデ	ナデ		
21 陶器	杯	SP05	(12.8)	—	4.7	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.3mm以下の砂粒を含む	3/4	ロクロナデ	ロクロナデ		
22 土師器	杯	SP05	(14.1)	—	8.0	10YR8/4	10YR8/4	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	2/5	ナシキ	ナシキ	外側模様付	
23 陶器	杯	SP09	—	—	(8.15)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/19	ロクロナデ	ロクロナデ	横筋付	
24 土師器	杯	SP14	—	—	(2.25)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部1/10	ナデ	ナデ	外側模様付	
25 陶器	杯	SP17	—	—	(2.6)	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	ロクロナデ	ロクロナデ		
26 土師器	杯	SP18	(24.4)	—	(8.0)	10YR8/4	10YR8/4	深褐色	0.1mm以下の砂粒を含む	1/20	ナシキ	ナシキ		
27 土師器	杯	SP18	—	—	(2.0)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/20	ナシキ	ナシキ		
28 陶器	杯	SP19	—	—	(2.7)	NL	NL	深褐色	0.3mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ロクロナデ	ロクロナデ		
29 土師器	杯	SP19	(14.1)	—	8.0	10YR8/4	10YR8/4	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	2/5	ナシキ	ナシキ	外側模様付	
30 土師器	杯	SP19	—	—	(8.15)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/19	ロクロナデ	ロクロナデ	横筋付	
31 土師器	杯	SP19	(9.4)	—	(1.4)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部1/20	ナデ	ナデ	外側模様付	
32 土師器	杯	SP21	—	—	2.0	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/10	ナシキ	ナシキ		
33 土師器	杯	SP21	—	—	1.8	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/10	ナシキ	ナシキ		
34 陶器	杯	SP21	—	—	(2.4)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.4mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
35 土師器	杯	SP21	—	—	(7.4)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部模様付	
36 土師器	杯	SP21	(7.21)	—	(1.4)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.4mm以下の砂粒を含む	1/4	ナシキ	ナシキ		
37 土師器	杯	SP21	(9.4)	—	(1.4)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.4mm以下の砂粒を含む	1/10	ナシキ	ナシキ		
38 土師器	杯	SP21	—	—	2.0	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/20	ナシキ	ナシキ		
39 土師器	杯	SP21	—	—	1.8	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/10	ナシキ	ナシキ		
40 陶器	杯	SP21	—	—	(2.4)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ	外側模様付	
41 陶器	杯	SP21	—	—	(7.4)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	ナシキ	ナシキ		
42 陶器	杯	SP21	(8.4)	—	1.8	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	2/5	ナシキ	ナシキ		
43 陶器	杯	SP41	—	—	(6.4)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
44 陶器	杯	SP41	—	—	2.5	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
45 陶器	杯	SP52	(17.2)	—	5.25	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/5	ナシキ	ナシキ	外側模様付	
46 土師器	蓋	SP54	—	—	9.5	1.7	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	底面裏面有り
47 陶器	杯	SP57	—	—	(10.9)	3.55	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/3	ナシキ	ナシキ	
48 陶器	杯	SP53	(18.4)	—	4.15	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/3	ロクロナデ	ロクロナデ		
49 陶器	杯	SP57	—	—	3.85	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/3	ロクロナデ	ロクロナデ		
50 陶器	杯	SP73	(36.4)	—	2.35	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/4	ナシキ	ナシキ		
51 陶器	杯	SP90	—	—	(6.2)	0.95	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/3	ナシキ	ナシキ	
52 陶器	杯	SP93	(10.0)	—	(1.35)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
53 土師器	杯	SK03	8.0	—	1.6	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	4/9	ナシキ	ナシキ		
54 陶器	杯	SK06	—	(12.0)	(8.65)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	3/7	ロクロナデ	ロクロナデ		
55 陶器	杯	SK07	(12.9)	—	3.3	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
56 土師器	杯	SK08	—	—	3.8	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
57 土師器	杯	SK11	(24.8)	—	(6.1)	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	4/3	ナシキ	ナシキ		
58 土師器	杯	SK11	(22.1)	—	(26.35)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を主に含む	1/4	ナシキ	ナシキ		
59 土師器	杯	SK11	(10.0)	—	4.3	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/4	ナシキ	ナシキ		
60 土師器	杯	SK11	(17.0)	—	5.0	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部1/5	ナシキ	ナシキ		
61 土師器	杯	SK11	(22.7)	—	(4.4)	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
62 土師器	杯	SK11	(19.0)	—	7.9	10YR7/2	10YR7/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/2	ナシキ	ナシキ		
63 土師器	杯	SK11	(15.7)	—	4.2	2.55	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ	底面片側裏面有り
64 土師器	杯	SK11	(14.8)	—	7.45	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
65 土師器	杯	SK11	(13.8)	—	6.7	10YR8/2	10YR8/2	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/20	ナシキ	ナシキ		
66 土師器	杯	SK11	(9.9)	—	3.0	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	口縁部1/3	ロクロナデ	ロクロナデ		
67 陶器	杯	SK11	(8.8)	—	2.7	NL	NL	深褐色	0.05mm以下の砂粒を少量含む	1/10	ロクロナデ	ロクロナデ		
68 陶器	杯	SK11	(8.7)	—	1.3	10YR8/1	10YR8/1	深褐色	0.05mm以下の砂粒を含む	1/2	ナシキ	ナシキ		

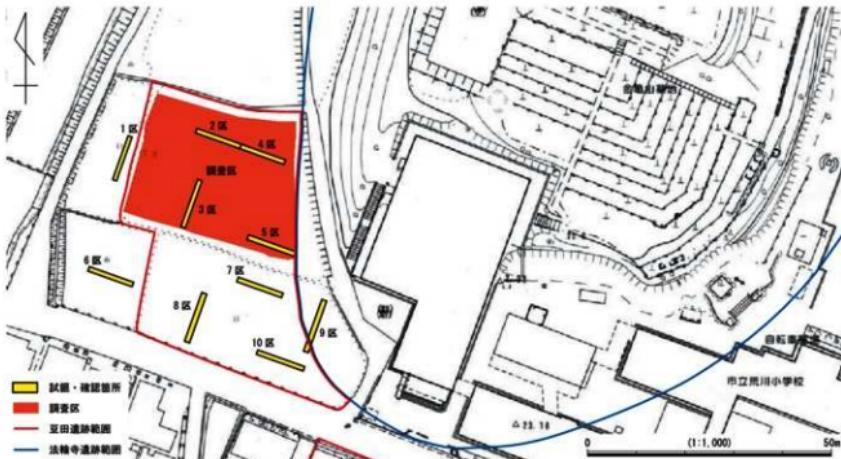
※残存率が1/木桶の部位に関しては、( ) を付けて復元した数値を示す。

図版1 遺跡



1. 豆田道路
2. 法輪寺山道路
3. 村前道路
4. 四ツ池道路
5. 池ノ下道路
6. 大沢口道路
7. 辻田道路
8. 鹿谷道路
9. 出手道路
10. 横枝道路
11. 堂田道路
12. 丁田道路
13. 中町道路
14. 大石橋道路
15. 斎川道路
16. 石田道路
17. 城田村城跡路
18. 藤田温泉
19. 山所群集塁1～8号塁
20. 山所道路
21. 山所寺
22. 山所南道路
23. 稲光ヶ淵1号塁
24. 稲光ヶ淵2号塁
25. 山崎城跡
26. 付城山群集塁1～4号塁
27. 付城山道路
28. 村東道路
29. 辻堀内道路
30. 土山道路
31. 石づき道路
32. 町田道路
33. 八反良道路
34. 西久保道路
35. 中御天神道路
36. 稲根道路
37. 郁東道路
38. 長経道路
39. 東久保道路
40. 大町道路
41. 大塚道路
42. 真福寺道路
43. 横道路
44. 千代田道路
45. 南歴町道路
46. 山崎道路
47. 手柄山北丘陵道路
48. 手柄山北丘群集塁3～12号塁
49. 手柄山南丘陵道路
50. 生糸神社裏道路
51. 村瀬道路
52. 横越道路
53. 黒表道路
54. 小山道路
55. 吉屋敷道路
56. 浜田道路
57. 竹の前道路
58. 煙田道路
59. 三宅道路
60. カスカエ道路
61. 藤田カスカエ道路
62. 善賀田道路

1 調査の位置と周辺の道路



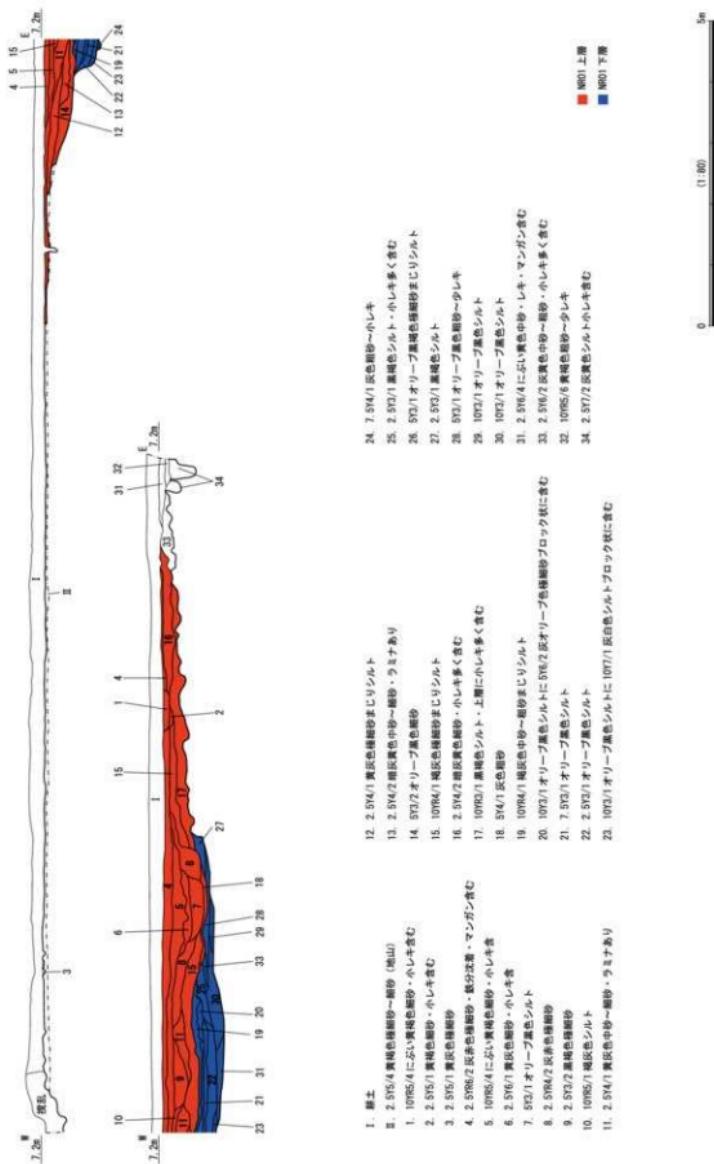
2 調査区位置図

図版2 遺構

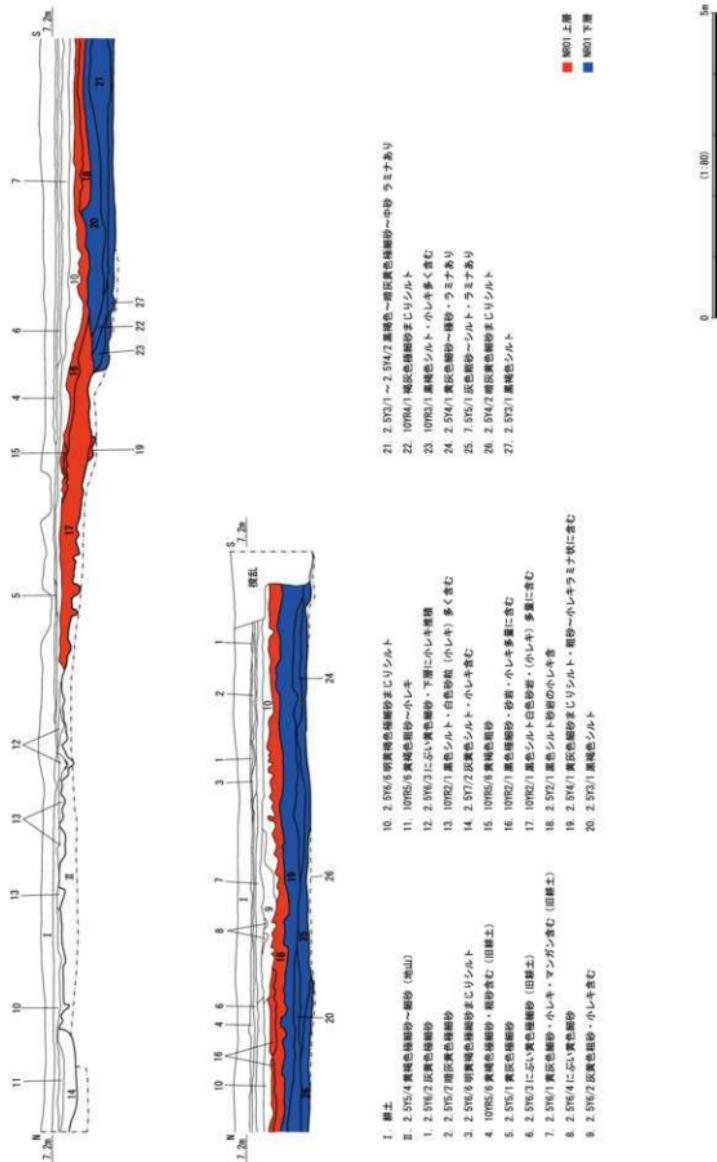


調査区平面図

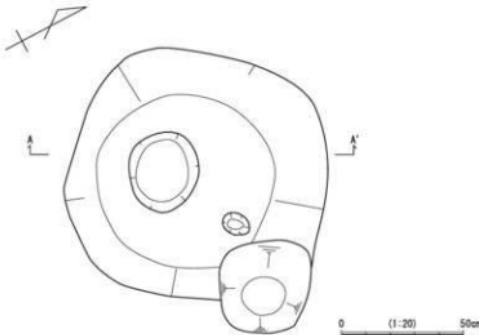
図版3 造構



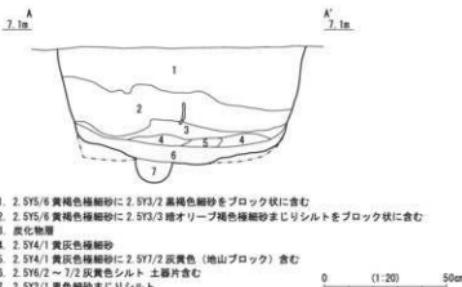
図版4 遺構



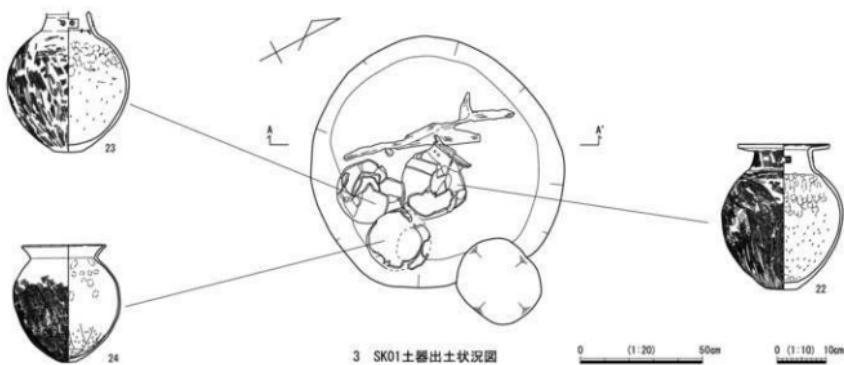
調査区東壁土層断面図



1 SK01平面図

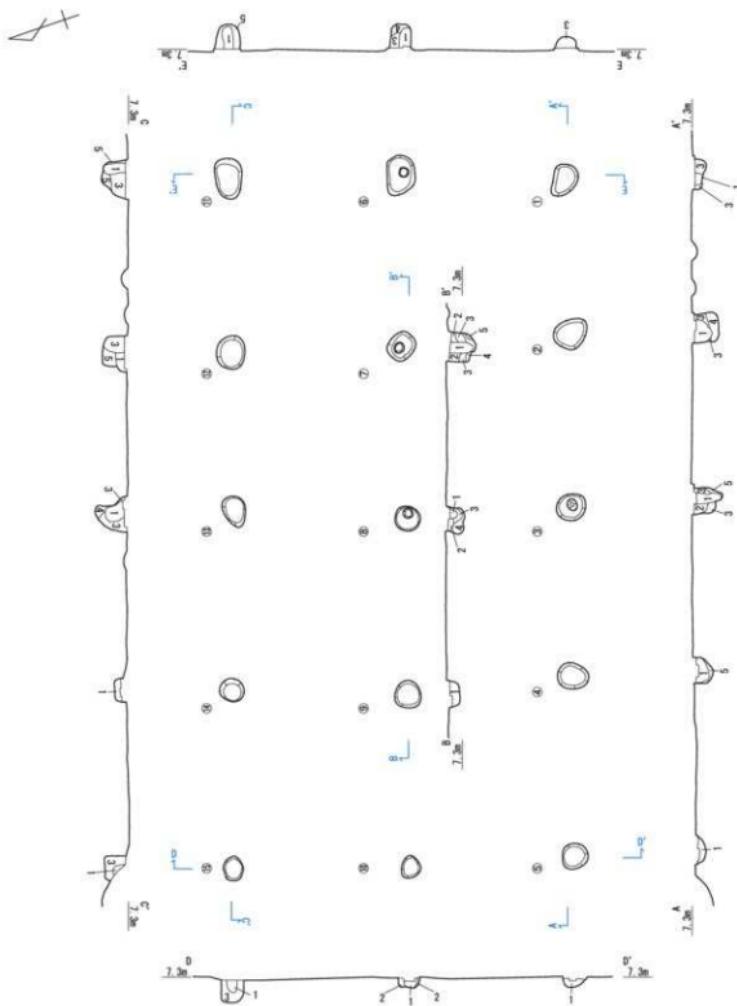


2 SK01断面図



3 SK01土器出土状況図

図版6 造構



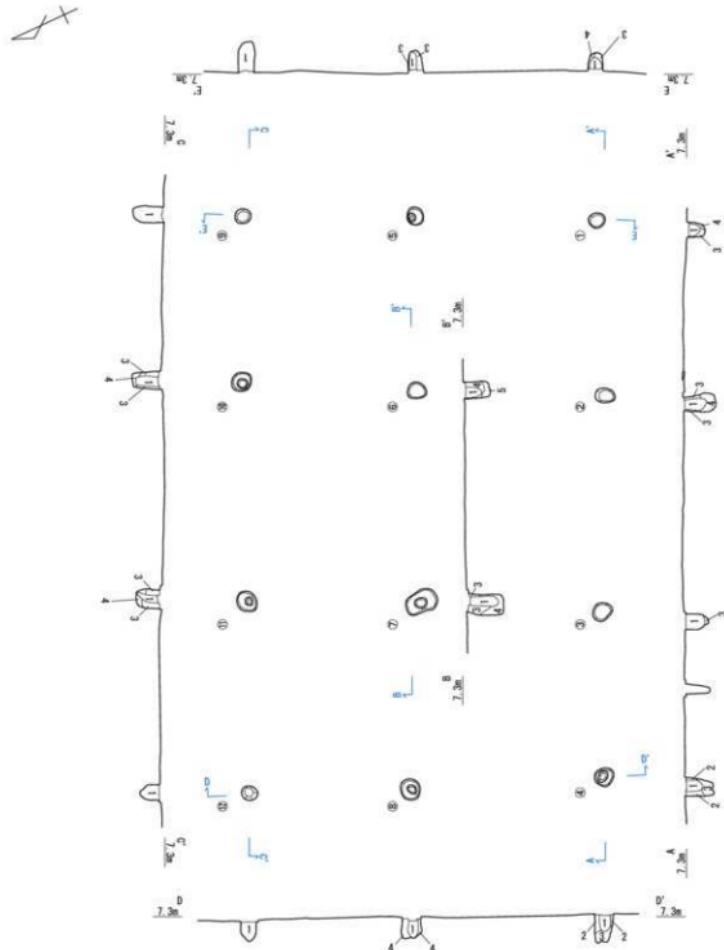
1. SY5/1 灰色細砂～白色粒 (1 mm大) 含む
2. SY5/1 灰色細砂一種細砂
3. SY5/1 灰色細砂に 10YR5/6 黄褐色細砂ブロック含む
4. 2.SY5/2 暗灰黄色細砂
5. 2.SY5/6 黄褐色極細砂に SY5/1 灰色細砂含む

①～⑩は SB01 内の柱穴番号

0 (1:60) 3m

SB01平・断面図

図版7 造構



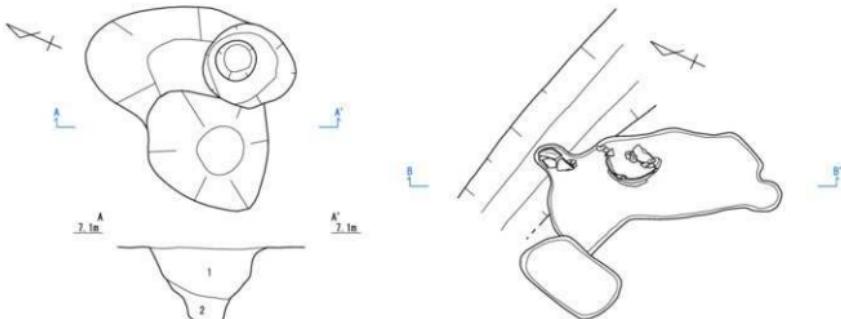
1. 10YR6/1 暗灰色細砂・2mm大の白色粒含む
2. 10YR6/1 暗灰色細砂・小レキマンガン含む
3. 10YR6/1 暗灰色細砂混シルト
4. 2.5Y4/1 黄灰色細砂シルトに 10YR5/6 黄褐色細砂ブロック状に含む
5. 2.5Y5/2 始黄灰色細砂に 1 ~ 2mm 大の白色砂含む

①~⑩は SB02 内の柱穴番号

0 (1:60) 3m

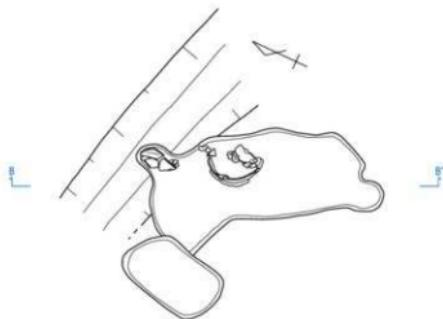
SB02平・断面図

図版8 造構



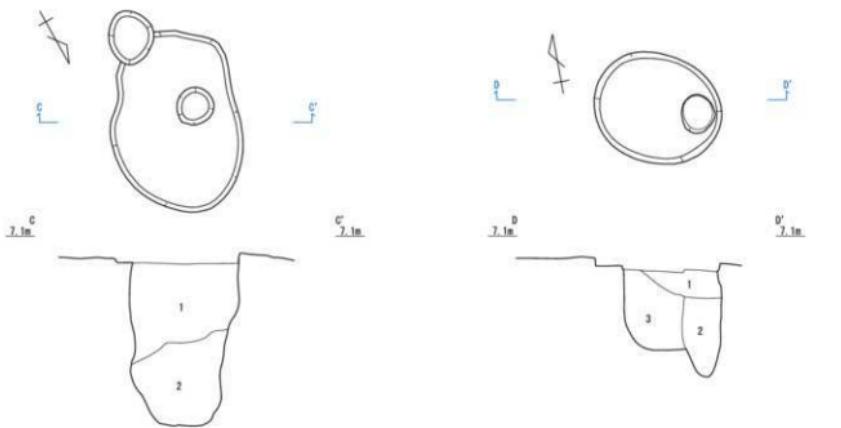
1. 2.SY5/2 緩灰黄色繊細砂に 2.SY5/4 地山ブロック含む
2. 2.SY5/1 黄灰色繊細砂混じりシルト

1 SK02 平・断面図



1. 10YR3/1 オリーブ墨色シルト
2. 2.SY4/1 黄灰色シルト 地山ブロック含む

2 SK03 平・断面図



1. SY5/1 灰色繊砂
2. SY5/1 灰色細砂に 10 YR4/4 棕色細砂ブロック状に含む

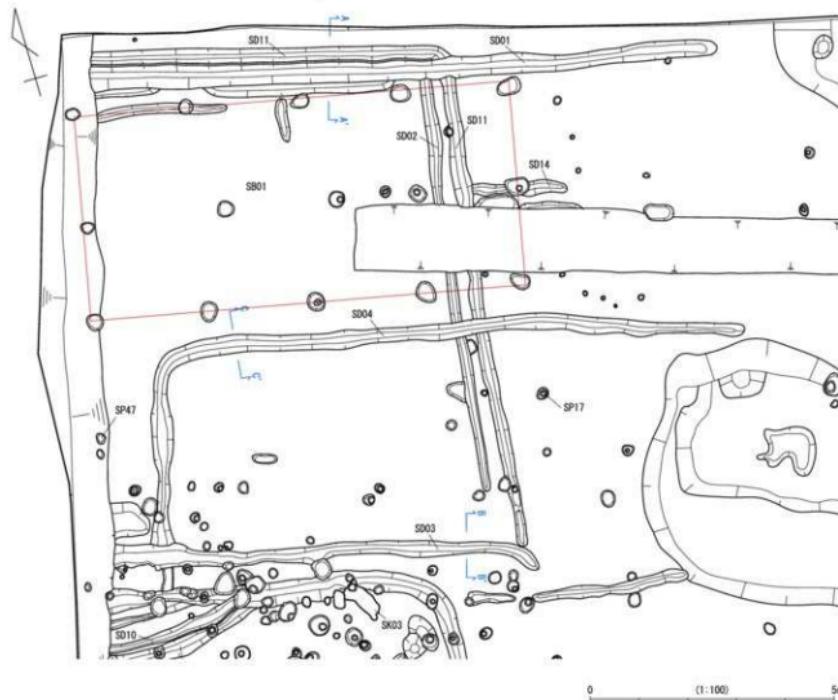
3 SK09 平・断面図

1. SY6/1 灰色繊砂・マンガン含む
2. 7.SY5/1 灰色シルト・地山ブロック含む
3. SY4/1 灰色細砂混じりシルト・地山ブロック含む

4 SP31 平・断面図

0 (1-20) 50cm

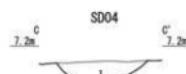
図版 9 造構



1. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂
2. 2.5Y5/1 黄灰細砂・マンガン含む
3. 2.5Y5/2 に 2.5Y5/6 極細砂まじりシルト含む
4. 10Y5/1 深灰色細砂・マンガン含む



1. 2.5Y5/1 黄灰色細砂・マンガン含む



1. 2.5Y6/1 黄灰色細砂に 10Y6/6 黄褐色極細砂・マンガン多く含む

0 (1:40) 1m

中世造構平・断面図 (2)

図版10 遺構



1. SY6/1 灰色極細砂・マンガン含む

6. SD06  
7. 1a.

1. 10Y4/1 桃灰色極細砂まじりシルトマンガン含む

F  
7. 1a.  
SD07  
7. 1a.

6. SD13  
7. 1a.

7. SD12  
7. 1a.

6. 7. 1a.

H  
7. 1a.

SD03

H  
7. 1a.

1. 2. SY6/3 にぶい黄色極細砂・マンガン含む

1. SY5/2 緑灰黄色細砂に 10Y4/6 軸砂ブロック状に含む  
2. SY5/1 黄灰色細砂

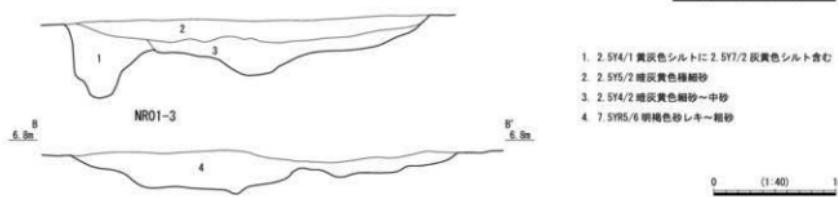
0 (1:20) 1m

中世遺構平・断面図 (3)

図版 11 造構



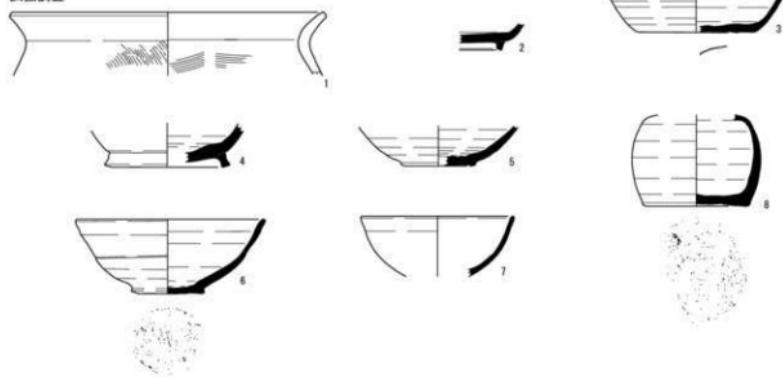
1. 2.SY4/1 黄灰色シルトに2.SY7/2 灰黄色シルト含む
2. 2.SY5/2 灰灰黄色細紗
3. 2.SY4/2 灰灰黄色細紗～中紗
4. 7.SY5/6 明褐色紗レキ～粗紗



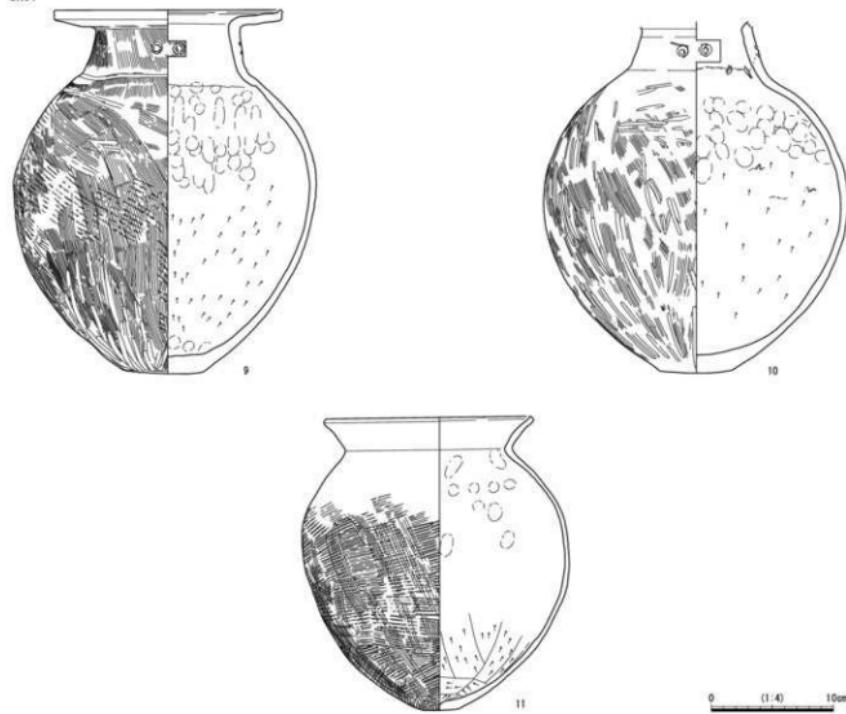
NR01平・断面図

図版 12 遺物

試掘調査

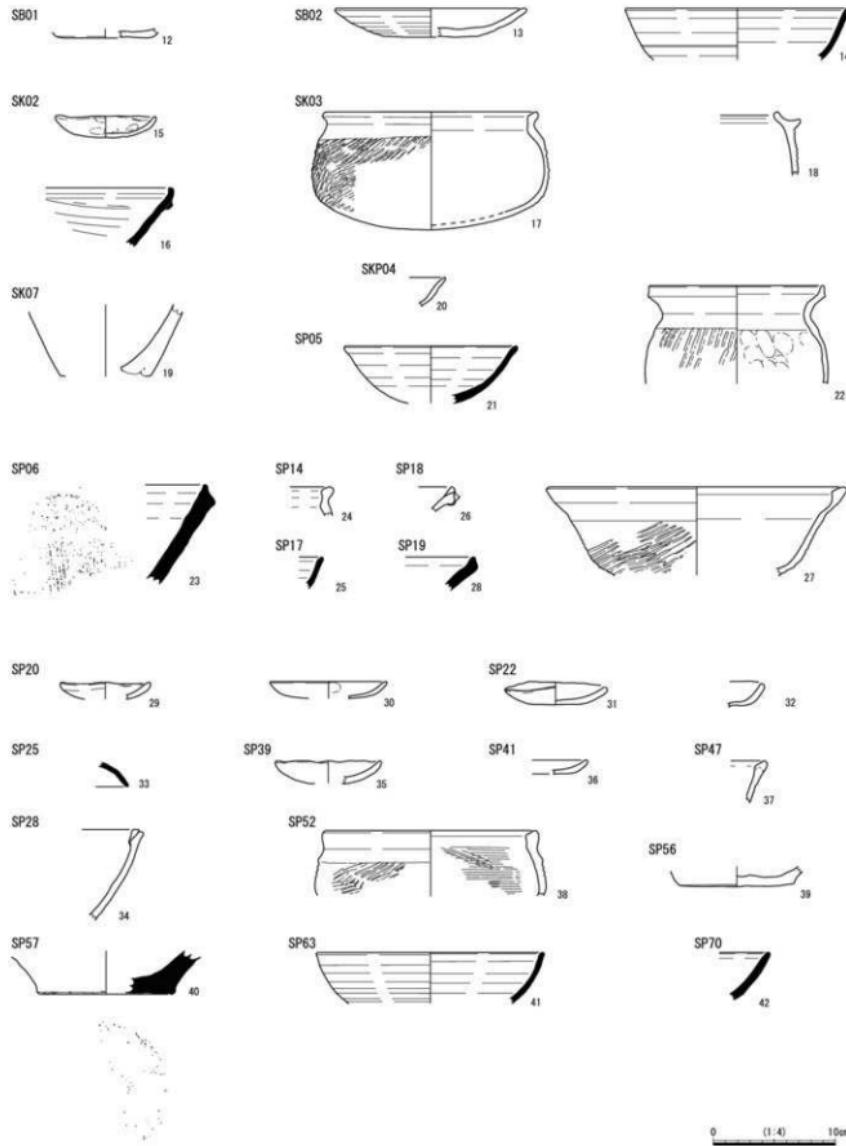


SK01



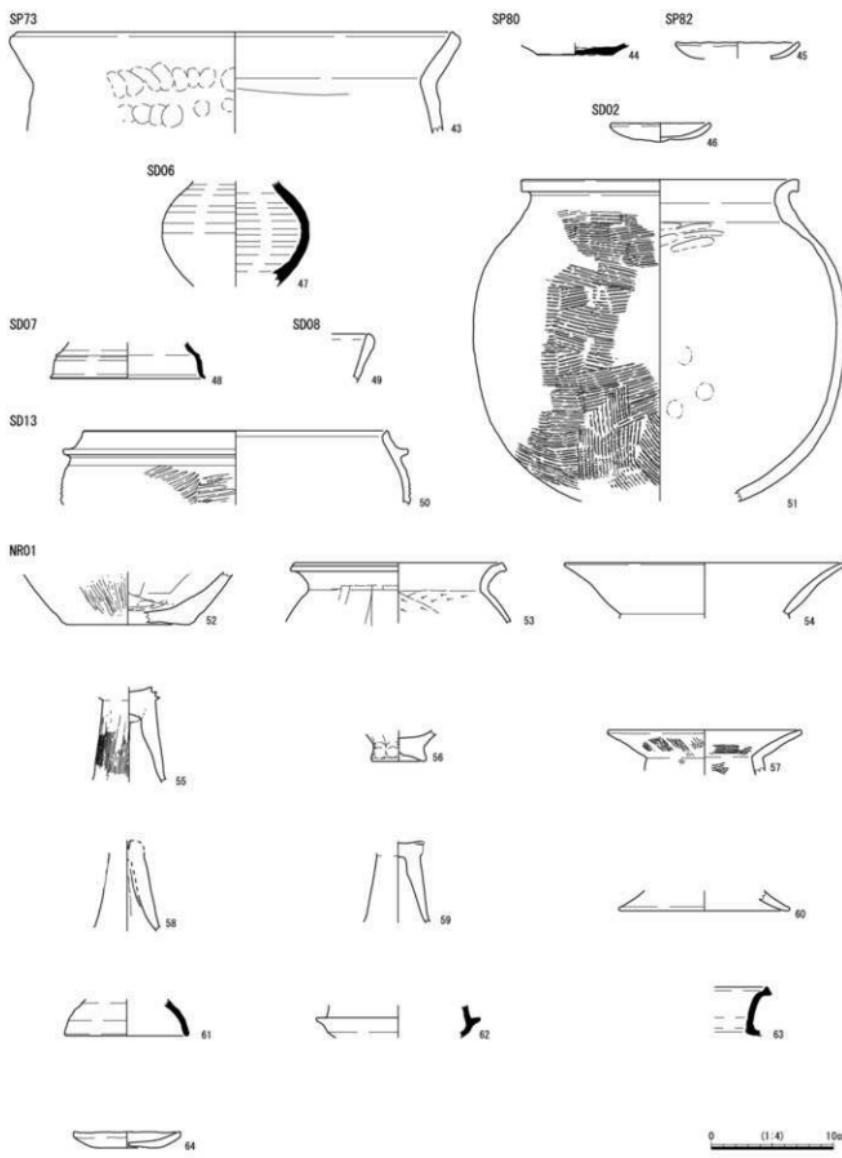
出土土器 (1)

図版 13 遺物



出土土器 (2)

図版 14 遺物



出土土器 (3)



調査区全景（北より）

写真図版 2



調査区全景（南西より）



調査区全景（西より）



SK01土器出土状況（南より）



SK01完掘状況（西より）

写真図版 4



SB01 (南より)



SB01 柱穴⑤土層断面



SB01 柱穴⑦土層断面



SB01 柱穴⑧土層断面



SB01 柱穴⑭土層断面



SB02 (北より)



SB02 柱穴①土層断面



SB02 柱穴⑥土層断面



SB02 柱穴⑧土層断面



SB02 柱穴⑪土層断面

写真図版 6



調査区北壁（西半）断面（南東より）



調査区北壁（東半）土層断面（南西より）



試掘調査 出土遺物



SK01 出土遺物



試掘調査 出土遺物



SK01 出土遺物



SK01 出土遺物

10

11

写真図版 8



15

SK02 出土遺物



50

SD13 出土遺物



17

SK03 出土遺物



53

NR01 出土遺物



22

SP05 出土遺物



55

NR01 出土遺物



31

SP22 出土遺物



姫路市埋蔵文化財センター調査報告第42集

豆田遺跡

姫路市立荒川小学校プール移転工事に伴う発掘調査

平成29年（2017年）3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1

TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社

〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目8-4